

NO.82

2009

東海体育学会会報

【東海体育学会】

〒467-8501

名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1

名古屋市立大学内

TEL/FAX.052-872-5839

〔ホームページ〕 <http://www.tspe.jp>

学会事務局 [E-Mail] tspe@htc.nagoya-u.ac.jp

TOKAI SOCIETY OF
PHYSICAL EDUCATION

2

0

0

9

新たな課題への挑戦に向けて

東海体育学会会長 穂 丸 武 臣

初夏の候、東海体育学会会員の皆様におかれましてはますますご活躍のこととお慶び申し上げます。

昨年末から始まった経済不況に加えて、新型インフルエンザの流行が重なり、世界中が不安な気持ちに包まれている。経済不況は地方自治体の財政悪化をもたらし、教育・研究費の圧迫にも直結しそうである。さらに学生の保護者が勤務する企業倒産や解雇問題で就学困難な学生の休学や退学が増えている。学生救済に向けて緊急対策を打ち出す大学も多い。一方、日本国内で新型インフルエンザの感染が確認され、水際の攻防が展開されているが非常に難しい問題である。我々ができるのは保健活動を通して学生に注意を喚起するのが精一杯の状況にあり、このような社会情勢がまだ続きそうである。

さて、今年の3月末、私が定年で大学を去ろうとする直前に感動する事柄があった。それは名古屋立大学の「障害児の親子教室」に参加しているK君と母親のことである。いつものようにエレベータから降りてきたK君が母親と手をつないで歩いて来るところに出会った。私がいつものように「いらっしゃい」と声かけをした。いつもなら母親の挨拶だけで通り過ぎてしまうのであるが、しかし、この日は違った、K君が「コンニチワ」とはっきりした声で挨拶を返してくれたのである。その時、なんとも表現できない喜びの感情に襲われた。私は、つい大きな声で「コンニチワ」と返していた。K君は私のあまりにも大きな声に驚いて母親の後ろに隠れるほどであった。母親は、この子が他の人にあいさつをするようになったと、とてもうれしそうに語ってくれたのである。

K君親子との付き合いは、すでに3年が経過していた。最初に保護者から提出された書類によれば、彼の障害について発達相談所から自閉症と診断されていた。母親は子どもの発達課題として社会性を育てたいと記していた。K君が月に2回の親子教室に参加しはじめて、私が観察記録を担当するようになったのは、彼が4歳のときであった。それ以来、親子遊びや運動遊びをVTRを撮りながら記録を続けた。K君はこの間、親にも他人にも視線を合わせることはなく、自己の要求も言葉で表現することはほとんど無かった。そのような状態が長く続く中で彼が自から他人に対して言葉を発したのを観察したのは、この時が初めてであった。「コンニチワ」という一語文の挨拶は、彼にと

ってはすばらしい発達であり、それは社会化への第一歩であることを感じた。

私たちは親子遊びの場を提供し、非常に長い時間をかけて子どもの発達を支援するために、多くの時間とエネルギーを費やしてきた。わずか一言の発語が引き出されるのに3年という時間を要したのである。しかし、家庭では保護者がわれわれの何百倍の時間と愛情を傾注してきた忍耐と努力が根底にあることを忘れてはならない。

私は、オレゴン州立大学障害児体育研究科のDr. John Dunnが力説していた「どのような重度の障害を持った子どもでも適切な指導と十分な時間をかければ、スピードは遅いが必ず発達する。」という言葉がK君の行動観察を通して実感したのである。

私にとって、障害を持った子どもの発達過程を明らかにするためには量的研究方法だけでなく、VTRや行動観察による質的研究の重要性を認識した学びの3年でもあった。質的研究法は人類社会学で用いられていた研究方法であるが、現在は発達心理学などでも質的研究法の重要性が再認識されるようになっている。また、健康相談活動における子どもの悩みや葛藤の問題解決にもナラティブアプローチ研究法などを用いた質的研究の成果が報告されつつある。私の属する発達発達分野でも量的研究法が主流であるが、研究対象によっては質的研究法を活用する必要があるという思いに至っている。

さて、東海体育学会執行部の昨年度の活動について言及しておきたい。まず、6月の中京大学における講演会、7月の研究交流委員会体育方法分野の名城大学における「フラグフットボール研修会」、そして、10月の三重大学における第56回東海体育学会大会、12月の愛知工業大本山キャンパスにおける東海体育学セミナー「アダプテッドスポーツの世界」など、多くの企画が周到に準備され実施された。これらの企画に参加し、体育・スポーツの世界にもさまざまな創造的な概念や発想が生まれていることを認識した。

企画にご協力いただいた方々および大学関係者に紙面をお借りして御礼申し上げます。次第である。

本年度は新たに「創造とスポーツ科学」をテーマとした課題研究への挑戦が始まる。各企画に多くの方々の参加を期待している。

企画委員会活動報告

企画委員会委員長 花 井 忠 征

2008年度理事会改選にともない、企画委員会も役員の改選が行われました。2008-2009年度は、花井忠征(委員長:中部大学)、庄司節子(副委員長:名古屋経済大学)、坪田暢允(名古屋学院大学)、北川薫(中京大学)、寺田恭子(名古屋短期大学)の5名体制で企画運営をしてまいります。

また、企画委員会には学会の活性化を図るために研究交流委員会が組織されており、11研究分野から新規に選出され学会が委託した委員の先生方32名によって運営されています。

今年度は、企画委員会と研究交流委員会が共同して以下の事業を展開しました。ご協力いただきました、多くの関係者の皆様に御礼申し上げます。

1.企画委員会・研究交流委員会合同会議の開催

第1回 4月19日(土)

名古屋市立大学(山の畑キャンパス)

議題:①新規研究交流委員会委員の紹介

②東海体育学会講演会について

③東海体育セミナーの開催について

④2009年度課題研究発表会について

第2回 6月21日(土)

中京大学(名古屋キャンパス ヤマテホール)

議題:①東海体育学会講演会について

②東海体育セミナーの開催について

③2009年度課題研究発表会について

第3回 12月6日(土)

愛知工業大学(本山キャンパス)

議題:①東海体育セミナーの開催について

②2009年度課題研究発表会について

③新分野「アダブテッド・スポーツ科学、会議福祉、健康づくり」分野の増設について

④2009年度課題研究発表会について

2.2008年度 東海体育学会講演会の開催

テーマ:『日本の体育・スポーツ系大学・学部事情』

講 師:北川 薫 先生(中京大学学長)

司 会:坪田 暢允 先生(名古屋学院大学)

日 時:平成20年6月21日(土)

午後2時30分～4時30分

会 場:中京大学(八事キャンパス ヤマテホール)

講演会参加者数:68名

(理事 19名 研究交流委員 8名 一般 41名)

大学全入時代が取りざたされているさなか、体育系大学・学部の新設、スポーツ系学科の増設が全国的に展開され、体育・スポーツ界にとって好機が訪れてきたように感じられます。しかし、この動向の実情はどのようなのでしょうか。また、大学におけるこのような動きが、日本の体育・スポーツ界にとってどのような影響をもたらすかなどを、大学経営陣のトップに就任され、体育界の重鎮である北川先生に講演をしていただきました。

講演会は、穂丸武臣会長の挨拶の後、坪田企画委員の名司会で進められました。

北川先生は、沢山のパワーポイントと資料をご用意くださり、「最近の体育系大学関連の動き」「体育系学部の状況」「中京大学大学院体育学研究科の状況」「体育系大学でのトップアスリートの養成」「アジアの体育、スポーツ科学」などについて講演いただきました。最後にご出身の東京大学体育学研究室新入歓迎スポーツ大会(1968年4月東大検見川グラウンド)の写真を披露され、現代の日本の体育界を動かしている諸先生方の若かりし頃のお姿を披露されました。

聴講者から活発な質問が多数出され、稔多い講演会となりました。

講演終了後、懇親会が行われ北川先生を囲んで33名の先生方が親睦をはかられました。



3.東海体育学セミナーの開催

テーマ:「アダプテッド・スポーツの世界」

日 時:平成20年12月6日(土)

司会進行:寺田 恭子 先生(名古屋短期大学)

講 師・シンポジスト:

寺田 恭子 先生(名古屋短期大学)

基調提案「アダプテッド・スポーツにスポットライトを!」

大槻 洋也 先生(中京女子大学)

「パラリンピックスポーツとアスリート -これまでとこれから-

荒賀 博志 氏(名古屋市総合リハビリテーション事業団)

「障害者の生きる力を育むスポーツ -スポーツセンターと地域の取りくみを中心に-

石田 直章先生(名古屋芸術大学)

「学生を巻き込んだ黎明期のJDPF(障害者パワーリフティング連盟)の発展への模索と活動」

参加者数:36名

<東海体育学セミナー報告>

報告者:寺田 恭子(名古屋短期大学)

2008年12月6日(土)、愛知工業大学本山キャンパスにて、14:30分より東海体育学セミナー「アダプテッド・スポーツの世界」が開催されました。シンポジストには大槻洋也氏(中京女子大学教授、北京パラリンピック日本選手団役員、車いすテニス監督)、荒賀博志氏(名古屋市障害者スポーツセンター主任体育指導員、アテネパラリンピック日本選手団自転車競技コーチ)、石田直章氏(名古屋芸術大学教授、北京パラリンピックパワーリフティング監督)、総合司会は花井征正氏(中部大学)、基調提案およびシンポジウムコーディネーターは、私が務めさせて頂きました。参加者は36名(演者等を除く)でした。

定刻通り14時30分に始まったセミナーは、予定終了時刻(16時30分)を少々オーバーする運びとなりましたが、“アダプテッド・スポーツ”という比較的新しい分野に、多くの方々が新鮮な刺激を受けられたのではないかと思います。

“アダプテッド・スポーツ”とは個々人の身体状況に応じて、やりやすいように工夫された運動やスポーツのことを言い、障害のある人の特別なスポーツだけを指すものではありません。しかし、“アダプテッド・スポーツ”という意味をより理解するには、そのコアとなる障害者スポーツのスポーツとしての認識や理解を深める事が必要です。

本セミナーでは、障害者スポーツの様々な現場に関わる方々のお話を通して、そのスポーツの多様な魅力に触

れながら“アダプテッド・スポーツ”というスポーツの意味が持つ本質や今後の可能性について考えるよい機会となったと思います。

今回は、ご発表頂いた先生方に簡単に発表内容等をまとめて頂きました。アダプテッド・スポーツへの理解が益々深まることを期待しています。また、この場をお借りしましてシンポジストの先生方ならびにセミナーの企画運営に関わる皆様、ご参加頂いた皆様に深く感謝を申し上げます。

セミナーでお話いただきました内容の要旨をシンポジストの先生方にまとめていただきましたので掲載します。

「パラリンピックスポーツとアスリート」

-これまでとこれから-

中京女子大学健康科学部

大槻 洋也

北京オリンピック終了後、同じ会場にて「2008北京パラリンピック競技大会」が開催された(2008年9月6日~17日)。147ヶ国及び地域より、約6000名(選手4000名、役員2000名)の参加があり、日本選手団は294名(選手162名、役員132名)が参加した。今回のパラリンピック開催は、国際オリンピック委員会(IOC)と国際パラリンピック委員会(IPC)が締結後初めて開催される大会であった。

以前までの大会参加であれば、オリンピックとは違いパラリンピック参加国は開催国に対して参加費を支払い参加していたが、今回の北京大会はパラリンピック参加選手・役員に関してもオリンピック同様に開催国が受け入れを行った。また競技運営に関しても、オリンピック競技運営者がパラリンピック競技運営を実施しスムーズに運営されていた。

私自身は今回「車いすテニス」の監督として、4回目のパラリンピック帯同経験をしたが、今回は前回にまして(2004年アテネ大会)、オリンピック同様に商業主義が色濃くでた大会であったと痛切に感じた。特にユニフォームなどロゴ規定(スポンサー標章)に関しては全競技者に関して厳しいチェックが実施された。

車いすテニスは、今回男子シングル金メダル、男子ダブルス銅メダルを獲得しハイレベルの大会ではあったが、メダルを獲得することができた。メダル獲得選手の環境を調べると、専属のプロコーチ及びトレーナー・契約スポンサー(ラケット・ウェア・車椅子等)がついており、年間海外トーナメントへの参加は3~4ヶ月あまりとなる。しかし海外トーナメントへは自費での参加であり、選手自身の資金が枯



写真：車いすテニスチーム

渴した場合は競技生活を続けることができないのが現状である。

国内においてオリンピック選手を統括する団体は、日本オリンピック委員会（JOC）であり、パラリンピックは日本パラリンピック委員会（JPC）が統括している。これはJOCが文部科学省管轄であるが、JPCは厚生労働省管轄であるという日本の縦割り社会が如実に表れた状況といえる。パラリンピック大会期間中に、メダリストへ報奨金を支払ってという情報が現地に流れてきた。報奨金は選手にとって、海外遠征費などの足しになることが予想できるので大変ありがたい情報であると話をしていたのが記憶にある。

結果、報奨金は厚生労働省内で決定したが（金メダル100万円）、税制上の法律が完備していないため、21年4月以降の支給となるようである。他国選手の状況を見ると、日本の報奨金制度よりかなり高額な報奨金を支給している国も多々みられるのが現状である。

報奨金だけではなく、前述の縦割り社会における「障害者のスポーツ活動」はあらゆる面において国内では弊害があるのが現状である。これは活動場所等の問題等々にわたっており、日本においてもスポーツ省設立を強く希望するものである。同じ「スポーツ」を行う上で、健常者・障害者の別なく活動できる国になってほしいとパラリンピックを通して強く感じるものがある。

しかし、考えているだけではなく、今回の研究会等々においてパラリンピック等の障害者のスポーツを紹介することが大きな広報活動になり、障害者のスポーツが徐々にでも理解されていくのではないかと思います。

今回、発表の場を設けていただいた東海体育学会及び実施にご尽力していただいた寺田恭子先生には紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

障害者の生きる力を育むスポーツ ースポーツセンターと地域の取り組みを中心にー

名古屋市障害者スポーツセンター

荒賀 博志

名古屋市障害者スポーツセンターは、プール、トレーニング室、卓球室、体育館のスポーツ施設がある。利用対象者は障害者専用であり、基本的に障害者手帳保持者（身体、知的、精神障害者）の利用になり、利用料は減免により無料になる。健常者はボランティアとして登録制度があり、施設を利用することができる。

次にセンターの事業については、1.個人利用者のスポーツ指導 2.スポーツ教室（申込、定員あり、年間16回程度） 3.種目別練習日（申込、定員なし、月1～2回）の開催 4.名古屋市障害者スポーツ大会の開催（陸上、フライングディスク、卓球、アーチェリー、ボウリング、水泳） 5.全国障害者スポーツ大会名古屋市選手団の派遣 6.センター主催大会の開催（卓球、水泳、アーチェリー） 7.地域交流事業（納涼祭、クリスマス会、カローリング大会） 8.医事相談（理学療法、神経内科、循環器） 9.クラブ育成（クラブ主催大会支援⇒場所の提供、当センター指導員の派遣）になる。地域事業については市内のSCで知的障害者の理解とスポーツ機会を増やすことを目的に出張教室と名古屋市教育・スポーツ振興事業団との共催教室を開催している。もう1つは精神障害者対象の施設と市の知的障害児入所施設でのスポーツ活動の支援をしており、指導員を派遣して障害特性にあった種目を実施している。このようにセンター内と地域での事業展開を行っているが今後の課題として 1.施設の老朽化 2.指定管理者制度のデメリット（予算の削減、雇用期間、長期ビジョンが立てにくい等） 3.ニーズに対応できない（予算と人員の不足） 4.指導員の育成・教育（大学等教育機関で専門的に学べる環境が少なく）が挙げられる。

最後に障害がある人たちにとってスポーツとは、体力が向上し活動が広がる、生活リズムを作るきっかけになる、成功体験を繰り返すことで自信の回復になる、スキンシップも取りやすく安心して人と関わられる、以上のことから集団での活動（社会参加）の導入にはスポーツという道具を使うことは最適であり、「生きる力」を育むことにつながっていくと考える。

学生を巻き込んだ黎明期JDPF（障害者パワーリフティング連盟）の発展への模索と活動

名古屋芸術大学人間発達学部

石田 直章

JDPF (Japan Disabled Powerlifting Federation) は、1999年に設立されたIPC Powerliftingの下部組織であり、これまでに、シドニー、アテネ、北京パラリンピックへ3選手を派遣した実績はあるものの、設立10年に満たない駆け出しの団体である。4年に1度世界選手権開催を開催し、国内戦は、日本選手権、西日本選手権、神戸市交流戦の3試合が公認大会である。パラリンピックへの参加のためには、これらの公認大会で記録した結果だけが正式記録として評価の対象となるため、その内の1つである西日本選手権は重要な大会である。2004年の第1回大会以来、この大会を名古屋芸術大学体育館において毎年開催している。当初より、学生のボランティアに多くを依存し、様々な場面で、学生の活躍する場を設定した試合運営を行ってきた。これは、大会を成功させるための1つの手段としてばかりでなく、教育の一環として、学生が障害者と接する機会を保障し、またアダプテッド・スポーツに対する理解を深める事にも資するものであると考えたからである。ボランティア学生の役割(仕事)として設定したのは、選手の誘導(駐車場から体育館へ)、受付、会場の設営、試合での申請重量の受け付けとアナウンス、懇親会でのもてなし(演奏:音楽学部学生)、JDPFのユニフォームのデザイン(Tシャツのデザイン:デザイン学部学生)、障害者用トイレへの案内、後片付け等である。特に、試合後に毎回実施している学生食堂を利用した懇親会には、音楽学部の学生による楽器の演奏や、コーラス、独唱等、芸術大学ならではのもてなしを心掛ける様に学生と相談し、工夫し、実施している。また、デザイン学部の学生ボランティア(4名のグループ)に、JDPFのTシャツのマークのデザインを依頼し、作成した。学生達は、自分たちがデザインした作品が、製品として成就する喜びを味わうと同時に、自らが考案したマークに込められた意味(車いすをイメージしたもの)を深く理解することも、大切な教育の一部であったと思われる。さらには、2007年から行っている日韓交流研修会で、韓国の留学生に通訳と介助を依頼し、大きな成果を得た。これらの取り組みは、学生を巻き込む事によって成立し、成り立っていると考えらる。

学生に対する教育上のメリットをまとめると、次のようである

1.アダプテッド・スポーツ(障害者スポーツ)に対する理解を

深める

2.障害者に対する理解を深める(対応方法など)

3.自分の専門領域で接することを覚える

(音楽、デザイン、保育・教育、通訳等)

4.人権意識の再確認をする

5.企画、準備の大切さを認識する

大会は、年々充実した方向へと発展している。この取り組みを継続し、教育にも生かしていきたいと考えている。

4.研究交流委員会活動報告

体育方法研究分野の活動報告

報告者:石垣 享(愛知県立芸術大学)

内容:「フラグフットボール講習会」の実施

日時:2008年7月6日(日)

会場:名城大学天白キャンパス/グラウンド

講師:横野 均 先生

(名城大学経済学部教授・同校アメリカンフットボール部監督・アメリカンフットボール元日本代表選手)

市川 敏伸 先生

(三好養護学校教員・名城大学アメリカンフットボール部コーチ・アメリカンフットボール元日本代表選手)

朝内 大輔 先生

(南山中学・高校男子部教員・同校フラグフットボール監督・1998年タッチダウンオールジャパン・選手)

運営事務局:

石垣 享(東海体育学会研究交流委員・愛知県立芸術大学)

日比 安平 氏(日本フラグフットボール連盟東海Div.事務局)

名城大学アメリカンフットボール部

平成20年7月6日(日)の午前中に、会場である名城大学の横野教授および「日本フラグフットボール連盟東海



ディビジョン」の日比先生の指導の下で、同校アメリカンフットボール部ゴールデンライオンズの選手の皆様によって講習会の設営をして頂き、定刻である午後2時30分から、藤井理事長の挨拶により講習会を始めることができました。

今回の参加者は、7名の学会員と2名の学会外の指導者の方々と少数でありました。これには、企画提出段階から実施までの期間が短いことが大きな要因であると考えられ、さらに県または市レベルの教育委員会との連携等も無かったことや、学会員全体の年齢が上昇していることも大いに関係しているものと考えられ、今後のこのような企画には、長期に亘る準備と安全性に関する周知が必要であると感じました。

講習は、参加者をこれまでにフラッグフットボールの指導経験を有する者とそうでない初心者に分けて、それぞれ別の内容で実施しました(表1参照)。この企画では、受講者に東海地区のフラッグフットボール初級指導員の資

格が取得できることから、日比先生を中心にルールおよび試合運営の説明後に、朝内先生を中心に球を投げる、捕る、渡す等の基本的な実技指導ポイントを中心に講習を行いました。そして、名城大学・南山中学混成チーム内に1ないし2人の初心者を入れて、模擬ゲームを2面で展開し、ゲーム内での注意点等をプレーの合間に指導経験者が指導しました。ここでは、10歳台から60歳台に亘る幅広い年齢層が一同に介してゲームが行えることが発見でき、生涯スポーツとして「フラッグフットボール」が有効であると確信しました。

懇親会は、穂丸会長の挨拶により始まり、この企画の現場を運営していただいた、名城大学アメフト部幹部等の学生達とほとんどの参加者によって意見交換がなされました。最後に、名城大学の榎野教授より、結びの言葉を頂き、無事に講習会が終了いたしました。

企画前の段階から講師陣より、今後もフラッグフットボール講習会を何らかの形で継続的に実施していきたいとの意見もあり、将来的には、指導およびチーム運営等でお互いに相談ができるような場として、この企画が発展するように考えております。

最後に、今回の懇親会に東海体育学会会長の穂丸先生より、多大なご援助をいただきました。この場を借りて、感謝の意を表します。ありがとうございました。

発育発達・測定評価分野の活動報告

報告者:藤井 勝紀(愛知工業大学)

東海体育学会発育発達・測定評価分野研究会 兼 日本発育発達学会東海地方月例研究会の開催を3回実施しました。

<第1回>

日時:平成20年4月26日(土) 午後2時～5時

会場:愛知工業大学本山キャンパス

メインテーマ:「科学的視点からの子どものスポーツ活動ガイドライン策定」

司会:石垣 享 先生(愛知県立芸術大学)

演題1:「スキー活動におけるガイドラインについてー子どもへの適用ー」

演者:斎藤 由美 先生(名古屋造形大学)

演題2:「子どもの表現活動におけるガイドラインについて」

演者:古市 久子 先生(愛知東邦大学)

表1.講習内容について

時間	指導経験者	初心者および小・中学生
14:00～	受付開始	
14:30～	東海体育学会理事長挨拶	
直後～	実技指導法研修 色々なスキル、ゲーム展開をいかにして教えるかの方法を中心に情報交換をし、実技指導に応用させやすい方法を考える。	フラッグフットボールについて講義 日比先生より、フラッグフットボールについての概略説明を行う。
15:15～	アメリカンフットボールのデモ (名城大学ゴールデンライオンズ) フラッグフットボールのデモ (南山中学)	
15:30～	実技指導 指導経験者は、初心者の指導。 榎野先生は、名城学生と南山生徒の混成チームによる実技指導	実技講習 指導経験者から、実技指導を受ける。
16:00～	模擬ゲーム運営法研修	模擬ゲーム体験
	名城・南山混成チームに、初心講習者入れて行う。 指導者は、メンバー交代、フォーメーション、プレーの選択を行う。	
16:30	講習会終了	
17:15～ 18:30	懇親会	

演題3:「各種指導員資格審査認定におけるガイドラインについて」

演者:花井 忠征 先生(中部大学)

<第2回>

日時:平成20年11月22日(土)

午後2時30分～5時30分頃

会場:愛知工業大学本山キャンパス

内容:メインテーマ「発育発達研究アラカルト」

演題1:「中高年の体力と健康指標に関する考察」

演者:佐藤 敏郎 先生(春日井保健センター)

演題2:「東南アジア(タイ・ミャンマー)における学校保健
開発の実践報告」

演者:中野 貴博 先生(名古屋学院大学)

演題3:「都道府県別中学生の体力分析」

演者:旭 隆裕 氏(岐阜大学大学院)

5.研究交流委員会新分野の追加報告

研究交流委員会の研究分野に、「アダプテッド・スポーツ科学,福祉,健康づくり」分野が新たに追加承認されました。

世話人は、寺田恭子先生(名古屋短期大学)にお願いし、研究分野のとりまとめをしていただくことになりました。

この分野で研究交流を希望される方は、寺田先生に連絡してください。

連絡先:terada@nagoyacollege.ac.jp

編集委員会活動報告

編集委員長 吉 田 文 久

2008年度 編集委員会事業報告

1.学会誌の編集・発行について

「東海保健体育科学」第30巻の発行については、「総説」1点、「原著論文」3点、「研究資料」1点を掲載した。また、理事会で承認された「学術奨励賞選考規定」の改正、10月26日の三重大学での総会において承認された「投稿規定」、「審査規定」の改正に伴い、第30巻にそれらの改正後の規定を掲載した。

なお、改正された「投稿規定」には、学会誌掲載論文の著作権を東海体育学会に帰属させることを盛り込み、それも承認されている。

2.諸規定の改定について

上述のように、現行の「投稿規定」、「審査規定」、「学術奨励賞規定」を委員会で検討し、改正の作業に取り組んだ。それらの本規定は理事会を経て、総会で承認され、「投稿の手引き」及び「審査の申し合わせ」、「審査要領」については、12月の理事会で承認されたのを受け、2009年度はそれらをもとに実施していきたい。

3.論文投稿・査読のオンライン化の先行的取り組みについて

今期の学会誌への投稿・査読については、電子投稿・査読システムのオンライン化の導入の検討にとどまらず、それを先行的・試行的に取り組み、「東海保健体育科学」

第30巻の掲載論文(昨年度からの積み残し「研究資料」1点を除いて)はすべて電子投稿・査読で行った。

時間短縮・省力化・費用の軽減などその効果として挙げられている点について成果があった。しかし、文書送付にかかわってミス(匿名性への配慮や誤送など)をなくす慎重さが改めて確認され、それらの検討を加え、次号からの取り組みに臨みたい。

4.「学術奨励賞」候補者の選考について

今年度の奨励賞候補者の候補者選考については、今まで明確にされていなかった選考基準を新たに設定し、作成した審査票の項目に基づいて評価を点数化し、高得点を得た発表者の中から候補者を協議により選考した。今回はポスター発表も審査対象に加えたが、口頭発表と同じ水準で審査することが難しいとの意見が出され、今後の課題とした。

5.学会誌のWEB化について

今年度は、学会誌のWEB化の素地をつくるということを経験として取り組み、規定の改正や電子投稿・査読のシステムの導入も目処がついたことから、WEB化については2009年度に本格的に取り組みたい。

2009年度 編集委員会事業計画

1.「東海保健体育科学」第31巻の編集・発行について

投稿論文数の拡大を図り、学会誌への投稿の気運を高めていきたい。また、他誌との差別化をどのように図るか検討し、本学会誌固有の意義を確立する取り組みにつなげたい。さらに、学会誌を研究成果の発表の場にとどまらず、研究者の情報交流を広げるための内容構成にしてはどうかという意見もあり、今後検討していきたい。

2.学会誌のWEB化の推進

前委員会で検討され提示された課題を克服するために、他学会での取り組みなどを参考にして検討していきたい。そしてできれば、次年度中に「東海保健体育科学」誌を

WEB化し、学会HP上に公開できるところまで進めたい。ただ、既刊の論文についてのWEB化についての検討が必要である。

3.論文投稿・査読のオンライン化の取り組みについて

学会誌への投稿・査読については、電子投稿・査読システムのオンライン化を定着させ、学会誌のWEB化と連動させて検討していきたい。

4.「学術奨励賞」の選考について

本年度新たに取り組んだ選考システムを整備し、選考に当たりたい。また、本賞の意義を知らせ、広報していくことで、研究の推進、学会発表数の拡大にもつなげたい。

広報委員会活動報告

広報委員長 来 田 享 子

2008年度の広報委員会では、以下の2項目について活動を行った。

- 1.ホームページの管理運営
- 2.東海体育学会会報第81号を2008年6月に刊行した。

刊行にあたり、原稿執筆の労をおとりいただいた会員等関係者各位、印刷費の援助をいただいた株式会社ミニ様に、感謝いたします。

学会大会委員会2008年度事業報告

学会大会委員長 小 林 培 男

1.第56回東海体育学会大会の開催

1)大会の概要

日時:2008年10月26日(日曜日)午前9時～午後5時45分

会場:津キャンパス三重大学ホールほか

内容:一般研究発表(14演題)、ポスター発表(9演題)、学会総会、パネルディスカッション(一般公開事業)

参加者:学会員(102名)、当日臨時会員(3名)、一般公開事業参加者(7名)、計112名

2)大会の概況

第56回東海体育学会学会大会が三重大学教育学部と鈴鹿医療技術大学の所属会員によって組織されました実行委員会のご尽力で盛大に開催されました。

今年度の学会大会の特徴は、全てのプログラムを同一会場で進行し、参加した会員が研究分野を超えて互いに交流しあおうとするものであり、もう一つは、第50回記念大会以来始めてポスター研究発表を採用したことであり

ました。

その成果の一つとして、一般研究発表数は増加し、口頭研究発表が14演題、ポスター研究発表が9演題となり、活発な研究交流が行われました。

学会総会に引きつづき、パネルディスカッションもタイムリーな企画で一般市民や関係者の参加を得て有意義に開催されました。この企画は、翌日の毎日新聞などにも写真入で報道されました。

ポスター発表後のフリーコミュニケーションが終了したのは午後6時過ぎて熱心な研究交流を物語っていた。実行委員会主催の懇親会が学内で催され参加会員、実行委員会および学会理事役員相互に本大会の成功とご苦労をねぎらって散会しました。

2.第57回東海体育学会大会開催候補の選定

1) 選定の経過

理事会および学会大会委員会で第57回大会の開催区分表を確認し、候補の選定に入った。これまでの開催回数や交通環境および実行委員会の構成などを参考に「愛知学院大学」を候補として選定した。愛知学院大学への打診の結果、受け入れの回答を得て、5月24日第4回理事会で提案決定した。

2) 第57回大会の開催概要

日時:2009年11月7日土曜日

場所:愛知学院大学日進キャンパス

3.学会大会活性化に関わる継続検討

学会大会委員会は、学会員の大会参加者を増やし、大会の内容の一層の充実を図るために引き続き学会大会活性化に関わる継続検討をする。特に若手研究者の参加および研究発表の機会の拡大のために、学会奨励賞との関係に配慮しつつそのあり方や工夫を2009年度事業化に向けて継続検討する。

東海体育学会第56回大会を終えて

東海体育学会第56回大会は、平成20年10月26日に三重大が主幹となり、講堂（三翠ホール）において開催いたしました。学会員の参加者数は約80名であり、多数の参加者により盛大に開催することができ、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

本大会の一般研究発表は、耐震工事による会場の設営の関係から口頭発表が1会場に制限され、他はポスター発表になりました。しかし、このような状況に関わらず、演題数は口頭発表が14（運動生理5、バイオメカニクス3、測定評価1、体育方法1、発育発達2、スポーツ経営学1、体育史1）、ポスター発表9（発育発達5、バイオメカニクス1、体育心理1、運動生理1、体育科教育1）と多数の発表が行われました。研究発表が1会場で行われたことから、研究分野以外の会員からの質疑も活発になされ、結果的には会員の皆様も満足していただいたように思います。

本大会のパネルディスカッションは、「北京オリンピックを振り返る」というテーマを掲げ、新聞を通じて一般公開を呼びかけましたので、来場者数は120名を越え盛大に行うことが出来ました。パネリストには、池田久美子氏（走り幅跳 日本代表選手）、前原正浩氏（日本卓球協会強化本部長）、和久貴洋氏（国立スポーツ科学センター先任研究員）をお招きし、杉田正明氏（三重大 NTC）の司会進行のもとで行いました。池田選手は「これまでの競技歴を話されたあと、オリンピックではプレッシャーによる精神的な重圧があり、決勝に進むことができなかったことを反省し、選手と指導者、周囲の連携が重要である」と指摘され、前原氏は「指導者養成のあり方を改革するとともにタ

学会実行委員長 脇 田 裕 久（三重大大学）

レント発掘・養成に力を注ぎ、低迷していた競技成績を向上することができたが、そのためには財源確保に力を入れるべきだ」とし、和久氏は「外国チームの情報を様々な手段で得ることが重要であり、五輪で良い成績を残すには、選手・所属チーム・指導者・日本オリンピック委員会が協力した態勢づくりが重要である」と述べられ、それぞれの立場から貴重な提案していただきました。メダル獲得に向けた各国のせめぎ合いの中での戦いでは、ほんのわずかの差が勝敗を左右するという勝負の厳しさについて直接お聞きすることができ、3名のパネリストの方々に感謝申し上げます。

総会は、穂丸東海体育学会学会会長挨拶の後、豊田三重大学長が登壇され、三重大大学においては心身の健康を中期目標・計画に盛り込み、重要な位置付をしている旨のご挨拶を頂くことができました。議事については、例年の議題に加えて寺田邦昭前東海体育学会会長が顧問に就任されることが承認され、今後も東海体育学会の行く末を見守って頂くことになりました。なお、本大会には、川嶋・木村両顧問も元気なお姿でご出席いただき、感謝いたします。

最後のポスター発表についても熱心な質疑応答があり、終了予定が1時間程遅れてしまいご迷惑をお掛けいたしました。当番大学としての責務を無事果たすことができ、本大会を閉幕することができました。本大会を開催するに当たり、ご支援、ご協力を賜りました学会当局および関係各位に深甚なる謝意を表し、大会実行委員長としての御礼のご挨拶といたします。

第56回大会の概況報告と傍聴記

学会大会委員長 小林 培 男

1.大会の概況

10月26日三重大学ホールにおきまして第56回東海体育学会大会が三重大学教育学部と鈴鹿医療技術大学の所属会員によって組織されました実行委員会のご尽力で盛大に開催されました。

参加者数は会員が102名、当日参加会員が3名、パネルディスカッションへのオープン参加者が7名の合計112名でありました。この参加者数は一昨年の岐阜聖徳大学で開催されました第54回大会に次ぐものでありました。

今年度の学会大会の特徴は、2つありました。その一つは、全てのプログラムを同一会場で進行し、参加した会員が研究分野を超えて互いに交流しあおうとするものであり、もう一つは、第50回記念大会以来始めてポスター研究発表を採用したことでありました。数年来検討してまいりました学会大会の活性化の一つとして実行したこの二つの取り組みは、参加していただいた顧問の先生方や多くの会員の皆様から“よい大会になりましたね”と概ね良い評価をいただいています。

その成果の一つとして、一般研究発表数は増加し、口頭研究発表が14演題、ポスター研究発表が9演題となり、活発な研究交流が行われました。

また、学術奨励賞表彰や学会運営関連審議などの学会総会に引きつづき、「北京オリンピックを振り返る」と題したパネルディスカッションもタイムリーな企画で一般市民や関係者の参加を得て有意義に開催されました。この企画は、翌日の毎日新聞などにも写真入で報道されました。

ポスター発表後のフリーコミュニケーションが終了したのは午後6時過ぎで熱心な研究交流を物語っていた。実行委員会主催の懇親会が学内で催され参加会員、実行委員会および学会理事役員相互に本大会の成功とご苦勞をねぎらって散会しました。(文責:委員長 小林培男)

2.座長から見一般研究発表傍聴記

一般研究発表(口頭発表・ポスター発表)とパネルディスカッションのとりまとめを頂いた座長および司会の先生方の傍聴記を会員の皆様にお伝えします。

「負けず嫌いな子の体力水準」は、負けず嫌いの判断が保育者の主観によるところが多く、尺度の客観性が求められるが、幼児におけるパーソナリティーと体力水準を

明らかにする有用な発表であった。「肥満幼児の体力水準」は、肥満児も標準児も体力差がないという発表であった。身長別標準体重を用いて肥満判定をしているが、筋量が多いことによって生じる誤った判定の可能性はないかとの質問があり、生理学的根拠に基づいた肥満測定法の確立が急務であることを改めて考えさせられた。(文責:花井忠征)

【ポスター発表】今年度の東海体育学会でのポスターセッションでは全部で9演題の発表がなされた。ポスター前でのフリーディスカッションの前に、各演者によって3分間の口頭での発表が行われ、聴衆はそれらを聞いた後、興味のあるポスター前で発表者とのディスカッションを行った。ポスター発表全9演題の内訳は、発育発達に関するものが5演題、バイオメカニクス、体育心理、運動生理、体育科教育が各1演題(いずれも発表申し込み時の申告による)であった。発育発達は口頭発表を含めても7演題と最も多かったが、その内、幼児の体力を扱ったものが4演題あり、パーソナリティーと体力、肥満と体力(口頭発表)、形態と体力、体格発達と体力(ポスター発表)に関するものであった。他の3演題は、中学生の形態と体力、中学生のスポーツ活動と体力・運動能力等に関するもの、それに若年者と高齢者の筋量の比較に関するものであった。発育発達の分野でも、MRIによる筋断面積の測定や骨密度の測定が普通に行われるようになってきたことが注目された。残る4演題は、水中から水面上にまたがる動作の撮影精度に関するもの、スポーツ活動における満足感を扱ったもの、「抜き動作」と「蹴り動作」を反応時間について比較したもの、運動学習において「できる」、「できない」この意味を追求したものであった。

今回は、ポスター発表がプログラムの最後に組まれており、先行のプログラムの延長で、時間が不足し、十分なディスカッションが行えなかったのが少々残念ではあったが、口頭発表も含め、大学院生や若手研究者の発表が増え、優劣はあるものの、全体的には研究内容、プレゼンテーションともレベルが上がってきたことが嬉しく思われた。(文責:座長 池上康男)

東海体育学会第57回大会のご案内

第57回大会実行委員会 実行委員長 佐藤 祐 造 (愛知学院大学)

東海体育学会第57回大会を平成21年11月7日(土)、愛知学院大学日進キャンパス(愛知県日進市岩崎町)において開催することとなりました。会場は、地下鉄東山線「藤が丘駅」から名鉄バス「愛知学院大学」行きにて約10分、あるいは名古屋駅にある名鉄バスセンターから、名鉄バス「愛知学院大学前」行きにて約40分という地に位置しています。発表会場となる愛知学院大学学院会館は、緑豊かで広大である日進キャンパスを一望できる高台に立地しています。本大会は57回目を迎え、前回愛知学院大学で開催されてから何十年も経つこともあり、本学実行委員会が総力を挙げて準備を進めていく所存でございます。

本大会の一般研究発表は、口頭発表とポスター発表を予定しております。会員の皆様における多数の演題申込をお待ちしております。なお、演題申込締め切りにつきましては、9月1日とさせていただきますのでよろしくお願い申し上げます。また、シンポジウムについても、体育・スポーツの社会的貢献に関する内容について取り上げ、会員の皆様の研究に少しでもお役に立つようなものにしたいと考えております。なお、シンポジウムは一般公開とします。

会員の皆様のご期待に沿うべく、最大の努力をする所存であります。何卒、一人でも多くの会員の皆様方のご参加を心よりお待ちしております。

東海体育学会第57回大会開催概要

【期日】

平成21年11月7日(土曜日) 受付午前9時

【会場】

愛知学院大学日進キャンパス学院会館

【内容】

一般研究発表・シンポジウム・学会総会

【参加申込】

学会員はどなたでも事前申し込み無しで参加できます

【発表申込締切】

2009年9月1日 (学会ホームページの申込フォーマットをご利用ください)

【抄録提出締切】

2009年9月1日 (詳細は学会ホームページもしくは会報をご覧ください)

【大会事務局】

東海体育学会第57回大会事務局(事務局長 長崎 大)

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 愛知学院大学 心身科学部 健康科学科

学会ホームページ <http://www.tspe.jp/>

E-mail 57-tspe@dpc.agu.ac.jp

電話・ファックス 0561-73-1111・0561-73-1142

交通アクセス <http://www.aichi-gakuin.ac.jp/access.html#no2>

東海体育学会第57回大会演題募集要項

第57回大会実行委員会 実行委員長 佐藤 祐造 (愛知学院大学)

【発表申込】

一般研究発表希望者は、東海体育学会ホームページ<http://tspe.sakura.ne.jp>の「学会大会一般研究申込用紙(EX専用フォーマット)」をダウンロードし、必要事項を記入の上、本大会事務局へ電子メールに添付して平成21年9月1日(火曜日)必着で申し込みください。

【発表資格】

演者および共同研究者は、東海体育学会会員で平成21年度会費を納入した会員です。但し、本学会員以外の者を共同研究者として発表に加える必要のある時は、「特別共同研究者の登録」(日本体育学会規定に準ずる)が必要となりますので、学会事務局へ連絡の上、必要な手続きをしてください。

【発表方法】

口頭発表およびポスター発表

【発表時間】

口頭発表は発表時間15分(質疑応答時間5分)、ポスター発表は3分(質疑応答は発表終了後自由討論)で行います。

【発表形式】

口頭発表ではパソコンプロジェクターおよび資料によって行います。資料を用いる場合は、各自で100部程度を準備してください。ポスター発表では、縦180cm、横90cmのボードを使用して所定の時間帯に掲示してください。

【抄録作成】

抄録の作成は、MS-Word(Microsoft word:Office 2003 for OS Windows, Office 2004 for OS Mac)を用いて、A4縦置き1ページ以内で作成してください。尚、ローマ数字や丸囲み数字などの文字化けを生じさせる機種依存文字は使用しないようご注意ください。抄録の内容は、演題・所属・氏名・キーワードおよび研究抄録(1000文字程度、図表は入れない)です。電子メールに添付し、下記の大会事務局へ9月1日(火曜日)必着で提出してください。

【その他】

東海体育学会学術奨励賞は、本大会において発表された一般研究発表の中から選考します。

【お問い合わせ及び申込先】

東海体育学会第57回大会事務局(事務局長 長崎 大)

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 愛知学院大学 心身科学部 健康科学科

学会ホームページ <http://www.tspe.jp/>

E-mail 57-tspe@dpc.agu.ac.jp

電話・ファックス 0561-73-1111・0561-73-1142

2009年度東海体育学会講演会お知らせ

東海体育学会企画委員会

平成20年3月の中学校学習指導要領の改訂で部活動を「学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるように留意すること」という方針が示された。いままで教育課程外に追いやって、あまりふれないようにしていた部活動が学校教育の中にふたたび位置づけたことの意味は大きい。それをそれぞれの学校がどう具体的に展開するかが今後問われることになる。

そのとき、いまで行ってきたことを着実に発展させていけばよいと考える学校があるかもしれないし、またあらたに相当の努力を傾けて従来と違った行き方をとろうと考える学校が現れるかも知れない。いずれにしてもこの方針に従うならば、それぞれの自校のこれまでのあり方を振り返ってみることからスタートしなければならない。自校の教育活動はどのように展開してきたのか、そこに本音では部活動をどのように位置づけていたのかを明確にする必要がある。これは、別の言い方をすると自校の教育の歴史と伝統を回顧し、再検討することである。

その点に関して考えるとき、私たちは検討してみるべき一つの好素材（モデル）がある。それは、1899（明治32）年から1917（大正6）年まで愛知県立第一中学校（現旭丘高等学校）の校長の任にあった日比野寛の学校経営であり、そのスポーツを通しての人間形成の営みである。日比野は、生徒に運動部活動を積極的に奨励しただけでなく、自ら生徒の先頭に立って全校生徒の長距離走（マラソンということばがなかった当時）を行ったり、ラケットを握ってテニスコートに立ったりして徹底したスポーツ教育を行ったのである。それは、我が国の中等教育界にあっては類を見ない先駆的なスポーツ教育であって、校長の職を辞した1917年に読売新聞主催東海道五十三次駅伝競走に関西組として単独で参加し、関東組に対抗したことや大阪朝日新聞主催の第3回全国中等野球優勝大会で優勝したことなどで一つの頂点に達した。こうした日比野校長時代の実績が愛知一中の伝統を形成し、日比野校長以後にも受け継がれたものとみられるし、また県内外の中等学校にも影響を及ぼしたと考えられる。このような日比野のスポーツ教育の実際とその伝統化を検討して、そこから私たちはいま、何を学ぶことができるのかを考えたい。

記

1.テーマ

今、スポーツ教育を考える ―日比野寛（旧制愛知県立第一中学校長）の教育を中心に―

2.講 師

木村 吉次 氏（中京大学名誉教授）

3.開催日時

2009年6月27日（土） 14:30～16:30（講演無料 終了後懇親会）

4.会 場

中京大学名古屋キャンパス ヤマテホール（センタービル0号館2F） 地下鉄鶴舞線八事駅下車5番出口より徒歩0分
〒466-8666 名古屋市昭和区八事本町101-2

〈キャンパス案内〉<http://www.chukyo-u.ac.jp/koho/gaiyo/map/map.html>

〈交通アクセス〉<http://www.chukyo-u.ac.jp/koho/gaiyo/map/kotu-n.html>

（注）公共交通機関をご利用ください。

問い合わせ：企画担当 庄司 節子（名古屋経済大学〈E-mail〉s-shoji@nagoya-ku.ac.jp）

在外研修報告I

世界遺産の町で生活した8か月

湯 海 鵬（愛知県立大学）

在外研究は、夢であった。県大では、毎年県費で2人の在外研究の枠はあるが、希望者が多く、大学へ赴任してから希望を出し続けたが、12年目になってやっと順番が回ってきた。

8ヶ月の勉強生活をしたのは、ビートルズやサッカーの強豪チームで有名な英国のLiverpoolでした。きっかけは、15年前初めて参加した国際学会であった。それはLiverpoolにあるJohn Moores Universityが主催した第一回国際ラケットスポーツ学会（今は第5回大会に数えられる）であった。学会主催者の一人A.Lees教授に手紙を出したところ、すぐ受け入れの返事を頂いた。John Moores Universityの歴史は長くはないが、体育学部のパイオメカニクス研究室は非常に充実している。

1.研究室内外

大学は市内と郊外の各所に点在しているが、在籍したSchool of Sport and Exercise Sciencesは市中心部にある4階建てのビルにまとめられている。実技の授業がないことで、体育館やグラウンドなどのスポーツ施設がない。学部は体育教員の免許を出さないで、卒業生はスポーツクラブや一般企業などに就職している。筆者が通っていた近くのジムには、学部卒業生が勤務している。大学にはもう一つ体育教員養成の学部が、バスで15分のかかる郊外にある。

学部には毎年約200人の学生が入学し、そのうちにバイオメカニクス、運動生理学、運動心理学などの専攻に分かれる。学生の約半数は地元周辺の出身で、留学生は約一割であった。イギリスの大学の修学年数が短く、学部3年、修士1年、博士3年である。バイオメカニクス研究室は5人の教員と一人の技術スタッフによって構成され、7人の博士課程の学生、10人前後の修士課程の学生が在籍していた。博士課程にアジアや欧州からの留学生が勉強し、特に中東からの学生が目立った。

8ヶ月の滞在は研究室通いの毎日でした。教授以外の教員スタッフが皆相部屋なのに、私は研究の個室を頂き、快適な研修環境に恵まれた。毎日の日課は、バイオメカニクス専門の授業、大学が留学生に用意したEnglish Help Classの授業、勉強会（Workshop）、毎週水曜日に

開かれる研究室の定例会議の出席であった。英語学習と授業の技法を学ぶために、週3コマのパイオメカニクスの授業に出席した。内容は学部から大学院までのレベルで、学部の授業でも結構難易度が高く、講義より測定や解析のような実践的な内容が多かった。大学院1年目の授業も前期から3次元DLT法と地面反力計測法を用い、歩行動作を分析するレポートが要求され、それがついて行けなく、退学した学生が出たほどの内容であった。



写真：大学院の授業風景 DLT法と地面反力の計測による歩行解析

毎週水曜日昼から1時間の研究室定例会議（名前はBiomechanics Revolutions）は、非常に機能的、効率的な会議であった。全員のスタッフと博士課程の学生などが出席し、研究室の運営から研究プロジェクトの進行状態、研究費の申請までを話し合っていた。

イギリスの国家研究費の配分は、日本の科研費のような申請制度とは異なり、学部単位で5年間発表した論文の業績によって、研究費の配布金額が決められる。滞在した研究室の研究費の最大の源はその国家予算、その他は民間からの委託研究費や他の国から委託された博士課程の学生の育成協力金である。

2.フットボールの街

Liverpoolは、18世紀から港貿易によって栄え、20世紀でビートルズの発祥と二つの強豪フットボールチームの保有によって世界に名を馳せた。街全体も2004年に世界遺産に登録された。2008年のEU文化首都に選ばれたことで、EUと国家から莫大な予算が注入され、前世紀で著しく衰退した街が少しずつ往年の繁栄を取り戻してきた。

イギリスはバドミントンやラグビーなどの発祥地であるが、Liverpoolでは、フットボールだけに人気ある。特にリーグ最多優勝回数18回（今年Manchester Unitedが18回を達成）を誇るLiverpoolの人気は高く、チケットは高値（38pound、昨年8月では約1万円）なのに、入手は大変困難であった。クラブ会員の中国友人から譲ってもらったチケットで見た試合は、今まで体験したことのない迫力満点のスポーツ観戦であった。席はLiverpoolサポーターの真中にあり、試合の進行中は周囲に座る観衆は誰もいない、終始立ったままで応援していた。



写真：Liverpoolのホームグラウンドで可愛いサポーターと

イギリスのフットボールの観戦は、アルコールは欠かせない。そろそろ試合開始なのに、席にはまだ殆ど人がいない。おかしいなと思ったら、試合直前に一気に席が埋められた。皆は球場内のパブでビールなどを楽しんでいたようだ。イギリス人は、TVでのフットボールの観戦は、家よりパブで騒いで見るのを好む。水曜あるいは土日に試合のある日になると、朝から街中にうきうきした空気が充満され、真っ赤なユニフォームで身を包んだ老若男女が街の興奮を一層もりたてる。試合時間になるとTV観戦のできるパブは超満員になり、その興奮は深夜まで続く。



写真：研究室の仲間とパブでのフットボール観戦、その日はLiverpoolがManchester Unitedに2対1で勝利、次のホームゲームも4対0で歴史的な大勝を収めたが、結局リーグ年間優勝はライバルのManchester Unitedに許した

3.バドミントンとゴルフの聖地

日本で担当しているバドミントンの授業で、学生によくイングランドにあるバドミントン誕生地と言われるバドミントン宮殿の写真を見せる。今回の在外研究の一つの宿願は、その聖地への参拝であった。インターネットで調べたら、偶然にその聖地を自ら訪ね、聖地のことを詳しく紹介したホームページを発見した。そのホームページは、まさにバドミントンの宝の山でした。主宰者の蘭和真先生（東海学院大学）にメールしたら、親切な返事を頂き、ホームページにあった聖地の写真を持って夢の旅に出た。

聖地のバドミントン宮殿の名前は「Badminton House」、所在地の名前は「バドミントン」、Londonから西へ約200 kmの辺鄙な村にある。Liverpoolからバドミントン村へ行くのは、まず電車で美しい港町Bristolへ行かなければいけない。途中バドミントンと縁の深いBirminghamを経由することになる。毎年3月に、最も古い歴史を持つバドミントン大会のAll England Openはここで開かれる。近年、イギリスの選手がほとんど準決勝までに残らなくても、大会のチケットが、一ヶ月前に売り切れの状態から、発祥地のイギリス人がバドミントンに対する熱い情熱が窺いさせる。今度の旅は、BirminghamでAll England Openを観戦してから、バドミントン村へ訪ねるという大変贅沢なバドミントンのフルコースであった。Liverpoolのバドミントン仲間の元シンガポール代表、いまイングランド協会競技普及専属職員Meibeさんの力で貴重なチケットが入手できた。準決勝だけ見てバドミントン村へ行く予定であったが、中国人選手が全種目の決勝に残ったことで、滞在を一日延ばした。結局1948年以来の一か国での全種目制覇（1948年以前はイングランドだけが制覇したことがある）の歴史的な瞬間が目撃できた。決勝は日曜日であったので、電車の本数が少なく、試合後体育館からBirmingham駅へ疾走してBristol行きの最終電車に間に合った。

聖地のバドミントン村は、Bristolからバスで2回の乗り換えが必要で、片道は約2時間かかる。村に行くマイクロバスは、一日4本、日曜運休、行きと帰りに乗っていたのは、私だけであった。約40分の道のりは、不安と興奮の交差する冒険的な気分が一杯であった。

バドミントンハウスは、約400年の歴史の持つ豪邸で、今でも第11代目のDavid Robert公爵が住んでいる。素晴らしい天気恵まれ、優しいおばさんに導いてもらって、公園を通り抜けてハウスの北側から辿り着いた。美しく神秘的なバドミントンの聖地を長時間で眺め、人生至福の一時を味わった。親切な庭師の案内で敷地に入り、1873年のある日にこの中でバドミントンを打つ風景を想像しながら



写真:バドミントンハウスの北側、手前の芝生は境目の見えないほど広大、建物にある大広間は、バドミントン誕生の聖地(一説では)である

ゆっくり散策できた。蘭先生のホームページで事前に敷地の広さが分かっていたが、改めてその広大さと雄大さに感動した。19年前蘭先生が撮った写真と照らし、町に唯一の雑貨店と郵便屋が合併した以外は、すべての景色が19年前とまったく変わらなかった。



写真:Old Courseの名所一石橋から18番ホールとクラブハウスへの眺望

Liverpoolに住んでいた学生寮(多国大学院生6人の合同フラット、研究室へ徒歩約10分の好立地だが、上下周囲がうるさく、冷蔵庫にある牛乳や卵がなくなる)の名前はSt Andrews Gardensである。スコットランドにあるゴルフの誕生地St Andrewsと同じことにびっくりした。そのゴルフの聖地を訪ねたのはある日曜日、世界でもっとも歴史の古いOld Courseは休みの日に当たることで、夢のコースをのんびり(立ち入りはOK!)散歩した。

滞在中に、主にラケットスポーツのバドミントン、テニスおよび卓球をよくやっていた。Liverpoolではサッカーの絶大な人気のおかげに、ラケットスポーツは非常にマイナーなスポーツになっている。意外にスポーツ施設も少なく、よく利用したのはLiverpool Universityの体育センターや各地区の公営体育施設であった。ただし場所の確保が難しく、料金も高かった。例えば、Liverpool Universityの体育館(プール、ジム、卓球室、アリーナなど使用可能)の利用料金は毎回4poundsである。天候の関係で大体11月から屋外でテニスができなくなるので、屋内コートの施設は少なく、毎回約千円の利用料も高かった。

今回の在外研究は、多くの方のお世話になったことで、無事に終了できた。快適な環境を提供してくれたJohn Moores UniversityのA.Lees先生と面倒をみてくれたJosさん、ご負担をかけした県大の丸山・早水(故人)両先生、Liverpoolの宿でお世話になった布目先生(名古屋大学)に、ここで感謝の意を表したい。

在外研修報告Ⅱ

インスブルック大学での研究活動報告

勝 亦 紘 一 (中京大学 体育学部)

1.はじめに

1975年夏、私はオリンピア(ギリシャ)で開催されたオリンピック青年セッションに参加した。帰途、イタリアから列車でブランネン峠を越え、オーストリアのインスブルック市を訪問した。実は当地が翌年(1976年)2度目の冬季オリンピック大会の開催地に決定しており、その大会施設や環境を自分の足で歩いてみたいと考えたからである。その時の印象は「スポーツ施設が山々の自然に溶け込んだ環境、歴史・文化の豊かな山間の都市」、こんな町に一度は住んでみたいと思った。

1982年夏、日本陸連はジュニア日本代表選手をヨーロ

ッパへ派遣した。私はコーチとして参加し、最初の試合会



写真1

場が奇しくもインスブルック大学の陸上競技場だった。5日間程度の滞在だったが、私は暇を見て大学構内を散策した。朝に夕に大学の施設を活用してスポーツライフを楽しむチロルの人の姿を垣間見ることができた。

2007年4月、我が小史をふり返りながら数えて32年後、中京大学の短期在外研究員としてインスブルック大学留学を申請した。審査を無事通過した時、大学人としての境遇に心より感謝した。

研究目的は、チロルの風土でインスブルック大学スポーツ科学研究所(学部)がどのような冬学期の教育課程を編成しているか、学生と一緒に授業やゼミナールへ参加して全貌を把握することだった。そして、常に時代のニーズに応じて変革が求められる体育やスポーツ教育・指導者養成のあり方、さらには高齢者のスポーツライフの拡大等々について研究を進めたいと考えての断行だった。

2.研究期間

2007年9月1日より2008年2月29日 6ヶ月間

3.研究機関

1) 研究所の組織

①ISW-Institut für Sportwissenschaft der Universität Innsbruck(インスブルック大学スポーツ科学研究所<学部>)

②USI-Sport<大学スポーツクラブ>

③BSA-Bundes Sport Akademie<国立スポーツアカデミー>

2) 研究所の教員組織

(1)運動学、バイオメカニクス-教授 2名、准教授 2名、講師 1名

(2)スポーツ医学、トレーニング科学-教授 2名、准教授 1名、講師 1名

(3)スポーツ教育学、スポーツ心理学、スポーツ社会学-教授 1名、准教授 2名

(4)助手 3名

(5)研究技術員 4名

(6)非常勤講師 89名

3) 学生数

(1)2007年冬学期履修登録者 799名

学士課程 70%、教職課程 19%、大学院課程 9%、博士課程 2%

注) 学士課程履修モデル別の履修者

健康スポーツ 44%、競技スポーツ 18%、スポーツマネージメント 38%

参考)2007年 夏学期卒業者(内は)女子学生数を示す
学士課程 559名(216名)、教職課程 151名(79名)

4)2007年冬学期開講科目



図-1

*講義系 22講座 *ゼミナール系 8講座

*実技・実習・演習系 70講座

5)3機関共有の施設(図-1参照)

P16 全天候型陸上競技場400M8レーン 観客席あり

P15 サッカー場天然芝 観客席あり

P11 サッカー場天然芝

P10 6人制サッカーコート人工芝1面

P17 テニスコート9面、内2面はスタンド席付き

P12 人工芝小グラウンド(ハンドボール)

P55 コンクリート舗装1面(インラインスケート場として)

P56 ビーチバレーボールコート3面

H3 室内プール

(25m6レーン+飛び込み5m、3m、板飛び込み)

H4~8 体育館5室

(Spielhalle, Turmhalle, Gymnastikhalle, Budohalle)
全室暖房完備、オーディオ装置完備、中央に更衣室+シャワー室

H40 試合用体育館1室

(3分割にして使用可、客席2000席)

*トレーニングルーム2室(フリーウェイト、油圧式とサイベックス・マシン併用、オーディオ装置完備、サウナ室1室)

*教室とゼミナール室・中小合わせて5室、図書室

*実験室、コンピュータ演習室、研究室、事務室、食堂

注)これらの施設は学生の授業を中心として使用するが、



写真2

近くの学校の生徒、大学スポーツクラブ(USI)の76講座の会員、そしてBSAの会員(指導者養成機関)が利用している。

4.研究機関の特色

①インスブルック大学スポーツ科学研究所(学部)は、ヨーロッパにおいて屈指の冬季スポーツ研究機関として位置付けられている。また「自然環境とスポーツ」「スポーツ教育」「野外活動」に関する豊富なカリキュラムは、指導陣と施設それに加えて立地条件に恵まれた環境は他の追随を許さない。

②次いで、研究所に付置された市民のための「大学スポーツクラブ」(USI-Sport)70講座は、その領域の広さと指導者の存在において、市民のスポーツライフに欠かさない位置と役割を担っている。すなわちスポーツクラブはスポーツを生活の一部と考える市民に、スポーツ施設をはじめ指導者と学生支援者を提供している。

③そして研究所に付置された「スポーツの指導者資格認定」機関(Bunds Sport Academia)である。ここは大学で学ぶ学生を含めて一般人を対象にした、オーストリアの各スポーツ協会が認定する国家指導者資格を付与する機関である。学生は希望により、学部で学ながらこの機関を利用して各種国家認定のスポーツ指導の有資格者となるための課程を履修することができるのである。

以上の3本柱の組織、すなわち学生は、①研究所(学部)でスポーツ科学とスポーツ実践による基礎を学び学士号を取得する。次いで修士、博士課程まで学ぶ機会が用意されている。

②スポーツクラブで指導体験を積み、そこで指導者としての力量を高める。③スポーツアカデミーにて指導者の資格を取得する。

この①から③の組織が同じキャンパス内で連動しているのが、当スポーツ科学研究所(学部)の際立った特色であるといえる。

5.インスブルック市の紹介



写真3

- 1) オーストリア、チロル州の州都で文化的な観光都市、大学都市、スポーツ環境都市(人口:13万人強 約10%が外国人 市街地海拔:600mで2500m級の山々に囲まれている)
- 2) 冬季オリンピック大会2度の開催都市(1964年と1976年) オリンピック施設は全て有効かつ日常で活用されていた。

6.研究活動の概要

1) 私の科目履修

(1) 講義の選択(2講座)

スポーツ教育学、バイオメカニク

(2) 実技の選択(5講座)

フリークライミング、インラインスケート+アイススケート、水中運動、体づくり運動と音楽、フィットネストレーニング

(3) 演習(1講座)教材研究

(4) ゼミナール(1講座)スポーツ教育学

(5) 集中・スキー実習(2008年2月3日～10日)

注) 全て快出席だった。今考えると健康の有難さを感じている。

7.まとめ

1) 教育・研究について

私は今回の体験的研究活動により、体育学の発展は実技や実習の授業研究の充実を図らなければならないと再認識した。

当研究所(学部)のカリキュラムは、冬学期に70の実技講座が開講され、どの講座も履修受付と同時に20～30名の定員で埋まってしまう盛況振りだった。

私は学部で授業を実際に受講した。当たり前ではあるが、毎時間感心するほど学生も教師も熱心だった。双方向のコミュニケーションが良くとれ活発だった。資料を配布し、ビデオで運動を再現する授業振りに教師のプロ意識を強く感じた。

また研究活動を散見していると、実にスポーツ現場を重視した研究活動が推進されていた。正に「現場に知あり」を体現している。

2) 発達と老化に関する運動の役割(写真4と5を参照)



写真4



写真5

当研究所のスポーツクラブでは、幼児や中・高齢者の運動・スポーツ活動が盛んだった。発育盛りの子どもには基礎的な運動を、高齢者には体力トレーニングや多彩なスポーツ・ダンスのプログラムが用意されていた。

わが国でも大学や研究機関が研究成果は勿論のこと、今後ますます運動施設・指導者を提供し多様な運動の学び方を伝えていかなければならない。

3) 私のスポーツライフ

スポーツライフを再検討する良い機会だった。私はスポー



写真6:インスブルック市の眺望を楽しむ筆者

ツを実際に関心が高かった。今回はテレビや実際に現場で冬季スポーツを観戦し、インターネットで日本のスポーツ状況を調べることが日課だった。そのことにより、スポーツを楽しむ活力を与えられている自分自身の存在を知った。スポーツを研究したり記録やスクラップすること、支えたり、観たり、応援したり、読んだりの全てが私のスポーツライフだと夢を馳せた。

チロルのスポーツライフ・スポーツ文化に乾杯!ありがとう!

研究室訪問 I

スポーツを「する」立場から「支える」立場へ

大 勝 志 津 穂（愛知東邦大学 経営学部 地域ビジネス学科）

愛知東邦大学は、2001年4月に東邦学園大学として開学し、経営学部地域ビジネス学科を設置しました。2007年4月に愛知東邦大学に校名を変更するとともに、人間学部を設置し、現在二学部で学生教育を行っています。

経営学部地域ビジネス学科は、「地域」をテーマに、経営、流通、観光、スポーツの観点から地域産業への理解を深め、ビジネスを成功へと導くノウハウを身につけることを目指しています。現在は、現代マネジメントコース、流通・サービスコース、観光ビジネスコース、スポーツマネジメントコースの4コースに分かれ、学生の興味・関心に応じてコースが選択できるようになっています。今回は、私が担当するスポーツマネジメントコースの学生を対象としたゼミ運営を紹介したいと思います。

スポーツマネジメントコースでは、経営学を基本にしながらスポーツに関連する知識を学び、幅広くスポーツに関するマネジメントに必要な知識と技術を習得することを目指しています。2008年度の3年ゼミでは、自分たちがスポーツを「する」立場だけではなく、スポーツを「支える」立場から考えてみることを目標に取り組みました。

まず、経営学部のゼミの時間に行われていたスポーツ大会を、経営学部全学年合同開催とする大会として企画し運営することに取り組みました。これまでのスポーツ大会は、ゼミの時間に行われていたこともあり、教員が中心に運営し学生はただ参加するだけでした。しかし、スポーツマネジメントコースができ2年目に入ることもあり、学生自身に運営をさせてみようと考えたのです。学生から積極的に「スポーツ大会を運営したい」という声が上がったわ

けではありません。しかし、学生にとって、自分たちで企画し運営する経験は、その難しさや大変さ、楽しさを知るよい機会になると考え、実行することとしました。種目を何にするのかというところからはじまり、試合方法や時間配分、表彰などを決めていきました。また、教室だけで解決できない問題については、自分たちで実際に試してやってみることによって最適な方法を決めていきました。大会には、14チームの登録があり、4リーグによるリーグ戦とリーグ戦勝者によるトーナメント方式で大会を行いました。当日ゼミ生は、呼んでも集まらない参加者に苦勞し、審判や結果の記録に忙しそうでしたが、なんとか無事に大会を終わらせることができ、受け身の体制から少し成長したように思えました。

次に、スポーツ施設の経営・運営を学ぶひとつの企画として、(株)ナゴヤドームを訪問しました。名古屋の大規模スポーツ施設であるナゴヤドームを見学できるとあり、学生は大喜びでした。ナゴヤドームの社員の方から、経営状況や運営方法、イベント誘致の方法、中日ドラゴンズとの関係など様々な話を聞くことができました。また、実際に球場におりグラウンド内を歩いたり、三塁ベンチに座ったりもしました。選手のロッカールームやピッチング練習場、トレーニング施設も見学させてもらい、学生は通常入れない施設に入ることができ、大変満足していました。しかし、私の課題はたくさん残りました。事前事後の取り組みとして、他のドームとの比較や他のスポーツ施設との比較を行うところまで内容を詰めることができなかったからです。今後、貴重な体験を十分に生かせるようにプログラムを考えると



写真:グラウンドに降りて



写真:三塁ベンチにて

もに、大学周辺の様々なスポーツ施設の運営・経営方法を見学し、実際の体験と机上での理論とが結びつくような機会を作っていきたいと考えています。

3つ目の取り組みとして、名古屋市名東区にある障害者スポーツセンターで行われた視覚障害者の卓球大会のボランティアに参加しました。この大会は、障害者スポーツセンターが中心となって行っているため、大会当日に会場に行き、審判の補助をすることが主な仕事でした。学

生は、障害者のスポーツについて講義で学んだことはあるものの、実際に目の前で障害のある人がスポーツをするところを見たことがなかったようで、ただただ驚いていました。しかし、障害があってもなくてもスポーツを楽しむことにかわりはないということを、学生自身は改めて実感したようでした。障害者スポーツセンターは、本大学と同じ区にあるので、単発のイベントだけではなく、日常的に学生が関わりをもてる企画を行えたらと考えています。

研究室訪問Ⅱ

スポーツ指導者育成について

鈴木 健 司（星城大学 経営学部）

星城大学経営学部スポーツマネジメントコースは2004年に開設され、その後2005年には日本体育協会の共通科目を講習試験免除コースとして認められました。さらに2006年には保健体育の教職課程が文部科学省より認可を受けました。

スポーツマネジメントコースでは各コース科目のほか、筆者のゼミナールにおいて、スポーツ指導者の育成の一環として、「体力づくりと体力テストの評価」として自分の体力を知ることとその評価方法について検討し自己分析の機会を与えること、また「ニュースポーツの指導」として模擬授業的な講義を展開しています。



写真：体力テストデータのまとめ

「体力づくりと体力テストの評価」では、有酸素的なトレーニングおよびウエイトトレーニングなど筋力トレーニングを実施します。学生たちは「スポーツ科学演習Ⅰ・Ⅱ」の講義でトレーニング方法は学びますが、それぞれ半期の講義で、また、方法論を中心に実施しているため、十分なトレーニングを行っているわけではありません。そこで、継続してトレーニングを実施する重要性を学生に認識させることも目

的としています。毎回実施するトレーニングの内容に合ったウォーミングアップを行うように心がけています。各時間のリーダーを決め、学生リーダーを中心にウォーミングアップやクーリングダウンを実施します。人の前に立ち、指示することも模擬授業の要素を取り入れています。

実施した体力テストの結果は、各自パソコンに入力して管理します。本学は、学生全員がパソコンを持っているため、体力テストを実施した直後から作業が始まります。二つのゼミがあり、各ゼミで全員のデータを集め平均値等基礎データを作ります。主に、自分の体力評価に用い、各々必要なデータ、特に専門スポーツ種目などの項目は個人によって異なりますが、自己分析の材料として同時に入力し管理しています。学期末にレポートを作成し、評価の対象としています。

「ニュースポーツの指導」では、2クラスの学生を5～6人程度でグループ分けをして、指導する種目を決定します。テニス型、ターゲット型、バレーボール型他で、得意とするものの、また初めて挑戦するものと状況は様々です。さらに指導の対象とする年齢、集団の特徴などを明示し、その特



写真：フライングディスクのスロー&キャッチの練習

徴にあった指導法を検討します。

講義の展開は、指導者側と受け手側に分かれ、設定した集団の特徴に合わせて受けて側の学生にあらかじめ指示をすることもあります。ウォーミングアップやクーリングダウン、及び種目の練習などの展開では、対象とする年齢層や性別などにおいて、スポーツ活動における外傷・障害の発生に関する特性を理解して、活動中の怪我や事故の発生を予防する対策を講じていきます。学生たちは、人の前に立ち指導する難しさや指導内容を展開する上で多くの準備をする大変さを味わい、スポーツを学ぶ心構えがより強固になっていくとの感想を持っています。

現在、地元東海市内の小中学校でスポーツ指導を行っている学生もいます。今後も、スポーツ現場で的確に指導ができるスポーツ指導者の育成に努めていきたいと考えています。



写真:フライングディスクのスロー&キャッチの練習



写真:アルティメットのゲーム

【お知らせ】

庶務委員会からのお知らせ

庶務委員長 高 石 鉄 雄
野 中 壽 子

1.東海体育学会の役員

氏 名	役 職	所属先名(日本体育学会登録先に準ず)
穂丸 武臣	会 長	名古屋経営短期大学
藤井勝紀	理 事 長	愛知工業大学
池上 久子	学 会	南山大学
池上 康男	広 報	名古屋大学
大桑 哲男	編 集	名古屋工業大学
岡本 敦	広 報 ○	東海学園大学
春日晃章	学 会 ○	岐阜大学
北川 薫	編 集	中京大学
小林 培男	学 会 ◎	日本福祉大学
桜井伸二	編 集	中京大学
正 美智子	編 集	名古屋学芸大学
庄司節子	企 画 ○	名古屋経済大学
高石鉄雄	庶 務	名古屋市立大学
坪田暢允	企 画	名古屋学院大学
鶴原清志	学 会	三重大学
寺田恭子	企 画	名古屋短期大学
富樫健二	広 報	三重大学
富岡 徹	会 計	名城大学
長崎 大	学会当番校	愛知学院大学
野中 壽子	庶 務	名古屋市立大学
花井忠征	企 画 ◎	中部大学
星川佳広	広 報	浜松ホトニクス(株)
森 勇示	編 集	愛知教育大学
山本 章	学 会	静岡大学
山本裕二	編 集 ○	名古屋大学
吉田文久	編 集 ◎	日本福祉大学
来田享子	広 報 ◎	中京大学
斉藤由美	監 事	名古屋造形大学
山本達三	監 事	愛知学泉大学
小栗和雄	庶務幹事	静岡産業大学

(◎委員長、○副委員長)

加藤 伸治(愛知県立春日井高等学校)
山田 耕司(NPO法人卓球交流会)
東 千夏(中京女子大学短期大学部)
亀山 有希(名古屋女子大学)
王 沢峰(中京大学大学院)
黒須 雅弘(東海学園大学)
長崎 大(愛知学院大学)
杉町 昭子(愛知大学)
渡辺 知彦(三重大学大学院)
坂本 幹(名古屋国際中学校)
加納 岳拓(三重大学大学院)
竹内 豊(名古屋大学大学院)
藤田 理(名古屋大学大学院)
藤巻 裕昌(愛知淑徳大学)
草薙 健太(中京大学 体育学部)
仙石 直子(名古屋市立大学大学院)
福富 恵介(岐阜県スポーツ科学トレーニングセンター)
山本 清文(浜松大学 健康プロデュース学部)
太田 恒義(常葉学園大学)
服部 友紀(愛知教育大学大学院)
飯塚 悠介(愛知工業大学大学院)
花木 祐真(愛知工業大学大学院)
井上 功一郎(名古屋大学大学院)
田村 雄志(中京大学大学院)
清水 和重(フリースクール元気学園)
清水 高子(フリースクール元気学園)

※所属機関変更など

稲島 修一郎(東海学園大学 人間健康学部)
佐藤 敏郎(新潟医療福祉大学)
山田 悠莉(岡崎女子短期大学)
吉田 文久(日本福祉大学)
水藤 弘吏(愛知学院大学)

2.会員の消息(平成21年5月23日現在)

※新入会員

兒玉 英華(愛知教育大学)
今井 辰也(三重大学大学院)

※転入会員

佐藤 善人(岐阜聖徳学園大学)
島 典広(東海学園大学 人間健康学部)
星川 秀利(浜松大学 健康プロデュース学部)

山本 彩未（中部大学 現代教育学部）

※転出会員

川田 裕樹（帝京科学大学）

※退会

杉浦 弘通

小山 憲路

石川 成道

原田 祥子

天野 和彦

今井 辰也

渡辺 知彦

竹内 豊

岸本 卓也

三浦 英雄

村松 常司

渡邊 功

藤井 隆志

平田 吉彦

辻本 尚弥

川浪 憲一

6.東海体育学会事務局

東海体育学会事務局の電話番号とFAX番号が変わりました。FAX利用の際は、「東海体育学会事務局宛」であることを明記してください。また可能な限りEメールや郵便を利用するようにお願いいたします。

東海体育学会に対するご意見、ご希望等ありましたら、以下の事務局にご連絡ください。

〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町山の畑1

名古屋市立大学 東海体育学会事務局

TEL/FAX 052-872-5839

E-mail:tspe@htc.nagoya-u.ac.jp

東海体育学会 郵便振替口座番号:00870-8-41336

3.東海体育学会HPについて

平成20年3月より東海体育学会のHPをリニューアルし、<http://www.tspe.jp/>へ移転しました。学会大会を始め、講演会、学会誌投稿規定など当学会に関する様々な情報を掲載しておりますので積極的にご利用ください。

4.日本体育学会への登録・訂正等

日本体育学会会員の方は名簿に訂正箇所がありましたら、学会員名簿や体育学研究の折り込みの用紙を利用して、日本体育学会に訂正依頼をお願いいたします。

東海体育学会のみの会員の方は東海体育学会事務局（上記HPに案内有）にお知らせください。

5.学会費の納入

日本体育学会会員の方は、預金口座振替による自動振込をご利用頂きたくお願いいたします。自動振込の申請用紙が必要な方は東海体育学会事務局にご請求ください。東海体育学会のみの会員の方は東海体育学会の郵便振替口座に年会費3,500円を納入ください。

編集後記

今年度の会報をお手元にお届けいたします。各種委員会報告の執筆をご担当いただきました委員長の先生方には、大変お手数をおかけし、ありがとうございました。今号の国際情報のページには、在外研究期間の生活の様子や渡航先で得られた貴重な教育実践・研究の様子について、お二人の先生から原稿をお寄せいただきました。また、研究室訪問のページにつきましても、お二人の先生から、大学での教育活動を臨場感あふれる画像とともに、お寄せいただきました。

会報は、東海体育学会の運営状況や会員の情報について、即時性を重視したホームページの情報とは異なる「読みもの」としてお届けすることをめざして発行しています。お寄せいただいた記事は、日々の忙しさに追われる気持ちを紛らわせるだけでなく、明日からの精進や授業での創意工夫への熱意を高めてくれるように感じています。

お忙しい中、ご寄稿いただいた先生方に、感謝いたします。

企画委員会による講演会、学会大会など、本大会の行事については、ホームページでできるだけ早くお知らせするとともに、会報として紙面でお伝えすることにより、多くの会員に情報が伝達され、また興味をお持ちの方にお知らせいただけることを目指しています。刺激に満ちた企画がなされていますので、会報の掲載記事をご利用いただき、非会員の方にもお知らせいただければ幸いです。

次号以降も会員の皆様の様々な情報を掲載したいと考えておりますので、ぜひ積極的に情報をご提供いただきますようお願いいたします。最後に、本会報は株式会社ミニミニのご支援をいただきまして発行することができました。お礼申し上げます。

広報委員会委員長 来 田 享 子

東海体育学会会報 No. 82

発行日 2009年6月1日 発行 東海体育学会 編集 広報委員会
事務局 〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町山の畑1 名古屋市立大学内
TEL/FAX 052-872-5839
E-mail tspe@htc.nagoya-u.ac.jp
ホームページ <http://www.tspe.jp/>



Do support sports

全国約450店舗のネットワークで、
皆様の新生活を応援します。

万全の集客体制・集客率でバックアップ

ミニミニは「明るく健全な店づくり」をモットーに、お客さまが来店しやすい店づくりを心がけています。そして、お馴染みの敷金・礼金0物件に加え、仲介手数料が家賃の52.5%で、家具家電製品付きのお部屋をご用意するなど、常にお客さまのニーズを考えてお部屋探しのご提案をしています。

全国に広がるミニミニネットワーク

賃貸ニーズを的確にとらえ、全国に約450店舗のネットワークを展開しております。

トータルサポートシステム

多様化するライフステージをトータルにサポート致します。



●ミニミニ店舗所在地

お部屋探しは、 <http://minimini.jp>



お部屋探しの強い味方

mini&mini ☎0120-19-3232

アパート・マンションの総合管理

minitech

☎052-971-0087